

AI導入の予算は、 どう立てるか。

初年度にいくら見ておくか、何から使うか

この資料で分かること

- 初年度予算の組み立て方（初期・運用・社内工数）
- 最初の1年で見落としがちな費用
- 補助金を当てにするときの注意点
- 投資に見合ったかを判断する数え方
- 予算が限られるときの優先順位

オブティソース株式会社 / 2026年版

AI導入の予算は、**ツール代だけを見ると必ず足りなくなります**。実際にかかるのは、決めるための時間、現場に定着させる手間、そして動かし続ける費用です。この資料は、初年度にいくら見ておけばよいかを、**費目ごとの目安と削れる順序**で整理します。

予算の多くは「導入したあと」に使われる

多くの会社が初期費用だけを見て稟議を通し、運用に入ってから足りなくなります。実際には、現場が使い始めてからの調整、使い方の共有、改善のための小さな追加開発が続きます。初年度は、初期費用と同じくらいの額を運用側にも確保しておく現実と合います。

補助金は、当てにせず「乗る」

IT導入補助金などは審査と入金まで時間がかかり、対象になる経費も限られます。補助金前提で計画を立てると、不採択のときに全部止まります。自己資金で始められる規模から入り、通ったら範囲を広げる、の順序が安全です。

01

最初の構築

対象業務を決め、動くものを作るまで。1業務に絞れば数十万円規模から始められます。

02

運用の費用

保守と小さな改善。初期費用と同程度を年間で見ておくと、途中で止まりません。

03

社内で使う時間

要件を決め、現場に説明する時間。金額には出ませんが、実質的に最大の投資です。

初年度に見ておく5つの費目

費目	中身	考え方
最初の構築	対象業務を決め、動くものを作るまで	1業務なら数十万円規模から
月々の運用	保守、小さな改善、問い合わせ対応	初期費用と同程度を年間で見る
AI利用料	モデルの利用料。使う量に比例する	少人数なら月数千円から数万円
社内の時間	要件を決める、現場に説明する、使い方を揃える	見落としやすい最大の費目
教育・定着	使い方の共有、手順の文書化	ここを削ると使われなくなる

予算を立てるときの8つの確認点

- ✓ **対象業務を1つに絞ったか**
複数同時は、費用も判断も倍以上になります。

✓ **社内の工数を数えたか**
担当者が何時間使うか。ここが実質的な最大コストです。

✓ **運用費を年額で見たか**
月額の12ヶ月分を初期費用と並べて比べます。

✓ **AI利用料の上限**
使い放題ではありません。上限を設定できるか確認します。

✓ **効果を何で測るか**
作業時間、件数、ミスの数。導入前の値を先に記録します。

✓ **やめる場合の費用**
解約時にデータを取り出せるか、違約金があるか。

✓ **2年目以降の見込み**
1年目より運用費は下がるのが普通です。上がるなら理由を確認。

✓ **誰の予算から出すか**
効果を受け取る部門が持つほうが、使われ続けます。

1業務・1部署から

全社導入は決めるだけで数ヶ月かかります。まず1つで型を作ります。

導入前の数字を記録

後からでは効果を語れません。今の作業時間を測ってから始めます。

運用費を先に確保

初期だけで使い切ると、直せないまま放置されます。

小さく失敗できる額に

1回目で当たらなくても続けられる規模から始めます。

予算は、**初期費用と同じ額を運用に用意できるか**で現実的かどうかが決まります。1業務に絞れば、初年度は数十万円規模から始められます。当社では対象業務の絞り込みから一緒に、**初期10万円～・月額10万円～**でお引き受けしています。

相談は無料です

現状を伺ったうえで、やらない方がよい場合はその理由をお伝えします。／ optisource.co.jp